

Shirayama

佐 呂 間 町

浜佐呂間 I 遺跡
HS-05 遺跡

— 道道留辺薬・浜佐呂間線凍雪害防止工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1991年
3 月

佐呂間町教育委員会

第IV章 佐呂間町浜佐呂間 I 遺跡

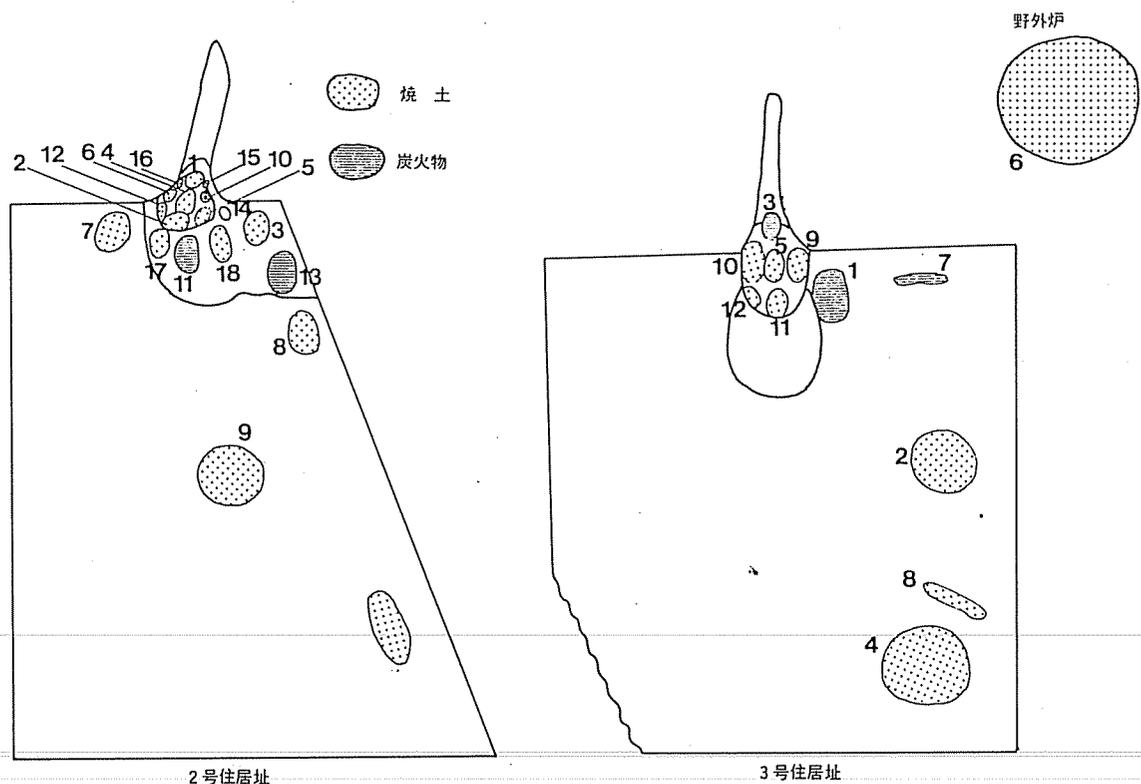
第1地点から出土した栽培植物と炭化材

山田悟郎・三野紀雄・椿坂恭代

1. 遺跡および試料について

浜佐呂間 I 遺跡第1地点で、第2号住居址と第3号住居址の2軒の擦文文化の住居址の発掘調査が行われた。住居址床面から出土した擦文式土器から、その時期は9～10世紀頃と推定されている。両住居址のカマド周辺や床面には炭化材や焼土の分布が認められたことから、植物遺体の抽出・同定、炭化材の樹種同定を行うため、これらの炭化材・焼土と、野外炉の焼土が分析用の試料として採用された。

2号住居址では18点の試料が採取されたが、その内No.5、11、13、14からは炭化材が、他の場所からは炭化物の小片を含んだ焼土が採取されている。3号住居址では12点の試料が採取され、その内1、7、10からは炭化材が、他の場所からは炭化材の小片が混じった焼土が採取されている。No.6の焼土は、3号住居址南東部で確認された野外炉から採取されたものである。それぞれの住居址での試料採取場所は第1図のとおりである。



第1図 2、3号住居址の試料採取地点

炭化材については電子顕微鏡を使用して樹種同定を行い、焼土については微細炭化物を採取して植物遺体の検出を行うため、フローテーション（浮遊選別）作業を行った。

2. 炭化材と植物遺体

1) 炭化材

a. 方法：炭化材の同定にあたっては、風乾の後それぞれ3個の小片に分割し、それらの小片を木材組織の木口面、柀目面、板目面を観察できるように安全剃刀でカッティングし、資料台に伝導性接着剤ドウタイトD-550で接着、さらに金蒸着の後に走査電子顕微鏡（JEOL-JSM-SI型）で木材組織を観察し樹種を同定した。その際、現在樹木の組織標本などを参照した。

b. 結果：2、3号住居址のカマド周辺部から出土した炭化材の樹種同定結果については第1表に示すとおりである。

第2号住居址の4ヶ所から採取された炭化材は*Abies* sp.（モミ属）、*Taxus* sp.（イチイ属）、*Kalopanax* sp.（ハリギリ属）、*Tilia* sp.（シナノキ属）、*Fraxinus* sp.（トネリコ属）*Quercus* sp.（コナラ属）、*Salix* sp.（ヤナギ属）と広葉樹の散孔材であった。

ただ、No.10とNo.11から採取された*Abies* sp.、*Kalopanax* sp.、*Taxus* sp.、*Tilia* sp.は、板材の破片で、カマドおよびカマドの炊き口から採取された他の試料とは状況が異なることから板材として使用されたものが混じりこんだ可能性が強い。

3号住居址のカマドとその周辺部3ヶ所から採取された炭化材は、*Quercus* sp.、*Taxus* sp.、*Fraxinus* sp.、広葉樹散孔材と広葉樹環孔材であった。

2) 植物遺体

a. フローテーションの方法および観察方法：両住居址の各所から採取された土壌サンプル（焼土）は室内（20℃）で7日間乾燥させ後に、人手の攪拌によるフローテーション法（バケツ方式）を実施した。浮遊した資料は、地学用フルイ2mmメッシュを上に、0.42mmメッシュを下に重ねたものに流し込んで採取した。採取した浮遊物については乾燥後に、双眼実体顕微鏡下で抽出・選別作業を行い、微細構造の観察・同定にあたっては、走査電子顕微鏡を使用した。また、フローテーション作業で沈下した残渣については、メッシュサイズ1.41mmのフルイの中で水洗し、他の遺物の回収を試みた。しかし、得られた資料のほとんどは砂泥・小礫で、一部に魚骨片が含まれていた程度であった。

電子顕微鏡（SEM）での観察にあたっては、資料を伝導性接着剤を用いて資料台に固定し、金イオンスパッタリング法により、5mA、1KV、DC、で3分間コーティングし、JSM-T20を用い加速電圧12.5KVで観察した。写真撮影にあたってはネオパンS（6×7cm）を使用した。

b. 結果：2号住居址のカマドおよび周辺部から採取された焼土からオオムギ、キビ、

第1表 住居址出土の炭化木片樹種同定結果

No.	出土遺構及び部位	樹種	組織の特徴	備考
10-1	第2住居址、カマド内の中央部右	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	針葉樹、夏材から秋材への移行はゆるやか、樹脂道を欠く	試料の形状は板状
2	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
3	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
4	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
5	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
6	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
11-1	第2住居址、カマド焚口の前庭部	ハリギリ属 (<i>Kalopanax</i> sp.)	広葉樹環孔材、孔圏内の導管の配列は1列、孔圏外では小導管の多数が複合し接線状に配列する、導管は単穿孔、射出線は多列	試料の形状は板状
2	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	No.10-1に同じ	同上
3	同上	イチイ属(<i>Taxus</i> sp.)	針葉樹、夏材から秋材への移行はゆるやか、仮導管壁に螺旋肥厚がある樹脂道を欠く	同上
4	同上	イチイ属(<i>Taxus</i> sp.)	同上	同上
5	同上	イチイ属(<i>Taxus</i> sp.)	同上	同上
6	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	No.10-1に同じ	同上
7	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
8	同上	モミ属(<i>Abies</i> sp.)	同上	同上
9	同上	イチイ属(<i>Taxus</i> sp.)	No.11-3に同じ	同上
10	同上	シナノキ属 (<i>Tilia</i> sp.)?	広葉樹散孔材、導管は小形で散在し単穿孔、螺旋肥厚がある、射出線は1-2-3列	

No.	出土遺構及び部位	樹種	組織の特徴	備考
13-1	第2住居址、床 面	モミ属 (<i>Abies</i> sp.)	No.10-1に同じ	
2	同 上	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	広葉樹環孔材、孔圏内の導管の配列は1ないし多列、孔圏外では疎らに散在し2個複合することが多い、導管は単穿孔、射出線は1-2-3列	
3	同 上	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	同 上	
4	同 上	モミ属 (<i>Abies</i> sp.)	No.10-1に同じ	
5	同 上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	広葉樹環孔材、孔圏内の導管の配列は1ないし多列、孔圏外では小導管が火焰状に配列する、導管は単穿孔、射出線の細胞配列は1列、集合射出線を有する。	
6	同 上	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	No.13-2に同じ	
14-1	第2住居址、床 面	ヤナギ属 (<i>Salix</i> sp.)	広葉樹散孔材、導管は小形で散在し単穿孔、射出線は1列。	
2	同 上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
3	同 上	広葉樹、散孔材	広葉樹散孔材、導管は密に散在し、1-数个放射方向に複合する、階段状穿孔、螺旋肥厚射出線は1-2-3列	
4	同 上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
5	同 上	広葉樹、散孔材	No.14-3に同じ	
6	同 上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
1-1	第3住居址、カ マド焚口の左外 側部	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
2	同 上	イチイ属 (<i>Taxus</i> sp.)	No.11-3に同じ	

No.	出土遺構及び部位	樹種	組織の特徴	備考
3	同上	広葉樹、散孔材	広葉樹散孔材、導管は疎らに分布、単穿孔、導管に螺旋肥厚がある、射出線は1-多列	
4	同上	広葉樹、環孔材	導管が2-3列環状に配列する傾向がある、孔圏外の小導管は単独、まれに2個複合、導管は単穿孔、射出線は多列	
5	同上	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	No.13-2に同じ	
6	同上	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	同上	
3-1	第3住居址、カマド内の奥中央部	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	No.13-2に同じ	
2	同上	トネリコ属 (<i>Fraxinus</i> sp.)	同上	
3	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
4	同上	広葉樹、環孔材	No.1-4に同じ	
5	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
6	同上	広葉樹、散孔材	広葉樹散孔材、導管は密に分布、単穿孔、射出線は1-2-3列	
7-1	第3住居址、床面、北東部の壁	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	No.13-5に同じ	
2	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	同上	
3	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	同上	
4	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	同上	
5	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	同上	
6	同上	コナラ属 (<i>Quercus</i> sp.)	同上	

第2表 2号住居址から出土した植物遺体

No.	遺構名	サンプル採取区	土壌 体積 (ℓ)	浮遊 物量 (g)	オオ ムギ (粒)	キビ (粒)	アサ (粒)	不明 種子 (粒)
1	2号住居址	カマド内奥部分	1.0	5.0				1
2	''	カマド内焚口中央部分	1.0	72.0		1	2	
3	''	カマド内焚口右横	2.0	5.5	1			
4	''	カマド内焚口中央部分	1.0	31.0				
5	''	カマド焚口右側部	1.5	5.0				
6	''	カマド内左側部	1.0	9.5				
7	''	床面北東部壁寄り	1.0	11.0				
9	''	床面中央部	0.1	2.5				
12	''	カマド焚口中央部左側	0.8	5.5				
15	''	カマド奥右側	2.0	62.0	3	5		
16	''	カマド奥左側	0.5	37.0		1		
17	''	カマド焼き口前庭左側	0.5	40.0		1		
18	''	カマド焼き口前庭右側	0.8	25.5	2	16		
			13.2	311.5	6	24	2	1

アサと種属不明の炭化種子が出土し、3号住居址でもカマドおよび周辺部からオオムギ、キビ、アサ、シソ属、ブドウ属、種属不明種子が、住居南側の床面からエゾニワトコ、ブドウ属、種属不明種子が出土している。両住居址の各所から出土した植物遺体については第2表、第3表に示すとおりである。

キビ (*Panicum miliaceum*) : 2号住居址から24粒、3号住居址から4粒出土した。内・外穎が取れた穎果の状態では出土したが、外穎部分の残存からキビ属表皮細胞の特徴である長細胞が確認された。ここでは、細胞組織・穎果・胚の形態、粒形からキビと同定した。図版1-1 aに示したものの計測値は、長さ2.0mm、厚さ1.3mmである。1 bは表面組織の拡大である。

オオムギ (*Hordeum vulgare*) : 2号住居址と3号住居址のカマド周辺部から25粒出土した。ほぼ完形な16粒について計測した、長さ、幅、厚さの計測値は第4表である。この内、No. 4、10、11については計測値がコムギに近いが、種子の形態がコムギと異なることからここではオオムギとしたものである。16粒の計測平均値は、長さ4.36mm、幅2.81mm、厚さ2.04mmで、オオムギとしては粒径が短く、長さに比較して幅が広い特徴を持つものである。図版1-3 a~3 bに示したものは長さ5.1mm、幅3.0mm、厚さ2.2mm。

第3表 3号住居址から出土した植物遺体

No.	遺構名	サンプル採取区	土 壌 体 積 (ℓ)	浮 遊 物 量 (g)	オ オ ム ギ (粒)	キ ビ (粒)	ア サ (片)	シ ソ 属 (粒)	エ ソ ニ ワ ト コ (粒)	ブ ド ウ 属 (片)	不 明 (粒)
2	3号住居址	南々東部床面	0.2	8.5					8		
4	"	南西部床面	0.2	9.0					1	* 1	
5	"	カマド焚口中央部	1.0	12.5							
		焼土その1右									1
5	"	カマド焚口中央部	1.5	12.0	6						
		焼土その2左									1
6	3号住居址外	南西部焼土の北部分	0.5	2.0							
		その1									
6	"	南西部焼土中央部分	1.5	2.5							
		その2									
6	"	南西部焼土南側部分	1.0	3.0							
		その3									
6	"	焼土部分外周部	1.0	3.0							
		その4									
6	"	焼土部分最外周部	1.3	4.0							
		その5									
8	3号住居址	床面南側炭化物	0.1	8.0							
9	"	カマド焚き口右側	1.0	36.0						* 2	1
10	"	カマド焚き口左側	1.0	50.0	1						
11	"	カマド前庭中央部	1.5	33.0	2	1					1
12	"	カマド前庭左側	1.8	37.0	10	3	* 1	1			
			13.6	220.5	19	4	* 1	1	9	* 3	4

※破片数は、*印で示してある。

第4表 オオムギの計測値(単位:mm)

No.(住居)	長さ	幅	厚さ
1(2号)	4.70	3.60	2.20
2(々)	5.45	3.20	2.50
3(々)	4.60	2.60	1.80
4(3号)*	3.30	2.10	1.30
5(々)	3.50	2.40	1.80
6(々)	4.60	3.00	2.70
7(々)破損	3.80 (4.7)	3.20	2.00
8(々)	4.40	3.40	2.00
9(々)	3.60	2.30	1.70
10(々)*	3.80	2.30	1.70
11(々)*	4.40	2.70	2.20
12(々)	5.10	3.00	2.20
13(々)	5.10	2.00	2.10
14(々)	5.10	3.00	2.10
15(々)破損	4.20 (4.7)	3.20	2.10
16(々)	4.10	2.90	2.20
平均値	4.36	2.81	2.04
分散	0.39	0.22	0.10
標準偏差	0.64	0.48	0.33

*は計測値がコムギに近いもの
()内の数字は復原値

構造をもとに表皮組織の観察を行った。その結果、図版2-5bに示したように、出土したアサから果皮の細胞が確認されたし、図版2-5cに示すとおり種の細胞をも確認することができた。しかし、近藤(1934)に示された横断面では果皮は5層からなり、種皮は管状細胞と海綿組織から成り立っているとされており、SEMでの表面観察で見られた果皮が、5層からなる細胞層の横断面のどれに対応するのかは今のところ不明である。この点に関してはこれからの検討課題としたい。比較のため現生のアサについて図版2-6a~6cに示しておいた。

エゾニワトコ(*Sambucus sieboldiana* var. *miquelii* H.): 3号住居址南側床面から9粒の種子が出土した。側面観が楕円形、上面観が偏平な楕円で、全面にしわ状模様が発達している。図版2-7aに示したものは長さ2.5mm前後で、7bは表面組織の拡大である。

ブドウ属(*Vitis* sp.): 3号住居址南西部床面とカマド焚き口右側から破片が3点出

シソ属(*Perilla* sp.): 3号住居址カマド前庭部左側から1粒出土した。資料の風化が著しいが、シソ属果皮の特徴である流線紋細胞の確認ができた。また、偏平で短卵形な果実の形態、臍の位置、粒形からシソ属と同定した。図版1-2aに示したものの計測値は、長さ1.95mm、幅1.55mm、厚さ1.35mm。2bは表面組織の拡大である。

さて、シソ属の栽培種としてはエゴマとシソがあるが、果種皮の基本的構造が酷似しているため出土した炭化種子の区分は極めて困難である。現生種子の比較では、エゴマの果皮は薄く容易に果皮を取り除くことができるが、シソの場合は果皮は厚くて固くできている。粒径では、エゴマの方がやや大きいなどの差異があることから区分が可能であるが、1粒しか出ていないことからここではシソ属の段階でとどめることとした。

アサ(*Cannabis sativa* L.): 2号住居址のカマド内焚き口中央部から2粒と、3号住居址カマド前庭左側から破片が1点出土した。資料の風化が激しく、ほぼ完全な形で出土したのは1粒だけであった。卵形または偏平で、縦に2条の稜角がある形態で、形態・臍の位置の確認をもとにアサと同定した。また、SEMを使用して、近藤(1934)によるアサ果実の細胞構造をもとに表皮

土した。その内の1点について図版1-4に示した。

3. 栽培植物に関する若干の考察

1) 擦文文化の栽培植物

このたび浜佐呂間1遺跡第1地点からオオムギ、キビ、アサ、シソ属の種子が出土したが、オホーツク海に面した地域の擦文文化の遺跡としては初めて栽培種が確認されたことになる。道内他地域の擦文文化の遺跡からは、第5表に示すように12の遺跡から、オオムギ、コムギ、アワ、キビ、米、ソバ、モロコシ、シソ属、緑豆、小豆ケツルアズキ、ベニバナ、アサなどの栽培種が出土しているほか、10遺跡でソバの花粉が確認されており(山田、1986)、擦文文化の生業の中に雑穀栽培が大きく取り入れられていたことが明らかになってきている。だが、栽培植物が確認されていた範囲は道南、道央、太平洋に面した道東、道北の日本海に面した地域および内陸部に限られ、オホーツク海に面した地域からの出土報告は一つもなく、栽培植物に関しては空白域となっていた。したがって、他地域の擦文文化の集団とは異なった生業形態を持っていたのではないかと推定されてきた経緯がある(吉崎、1988b)。したがって、このたび佐呂間町における擦文時代の遺跡から栽培植物が発見された意味は大きく、オホーツク海沿岸部においても他地域と同様に擦文時代に雑穀栽培が行われていたことが確実となり、これで雑穀栽培の空白域が埋まったことに

第5表 雑穀が出土した遺跡(擦文時代)

遺跡名	出土した栽培種	報告者
柏木川11遺跡	アワ、キビ、アサ	吉崎(1990a)
中島松5遺跡	アワ、キビ	吉崎(1990b)
サクシュコトニ川遺跡	アワ、キビ、オオムギ コムギ、コメ、小豆、 ケツルアズキ、アサ、 シソ、ウリ	G. Crawford (1986)
小平高砂遺跡	緑豆	山田(1983)
香川三線遺跡	オオムギ、キビ、アワ	G. Crawford (1987)
香川6遺跡	オオムギ、アワ、キビ シソ属	吉崎(1988a)
豊富遺跡	キビ、緑豆、ベニバナ	河野(1959)
K441遺跡	アワ、キビ、オオムギ ソバ、ヒエ?シソ属	吉崎(1989)
観音洞窟	アワ	石附(1984)
十勝太若月遺跡	オオムギ、キビ、シソ	後藤(1974)
札前遺跡	アワ、キビ、オオムギ コムギ、モロコシ、コ メ	矢野(1985) 山田・椿坂 (1989b)
西月ヶ岡遺跡	キビまたはモロコシ	岩崎(1966)

なる。栽培種の構成も「擦文オオムギ」、キビ、シソ属、アサからなり、ほぼ同時期にあたる、日本海に面した道北地方の香川三線遺跡や香川6遺跡で出土している雑穀セットと類似した構成を示すものである。

雑穀が出土した浜佐呂間I遺跡が当地域の擦文時代の遺跡の中で特異なのであろうか。これまでに、オホーツク海に面した地域で発掘調査が行われた擦文時代の遺跡で、土壌のフローテーションを行ったのは、知り得る限りでは、まだ報告は出ていないが1985年から1989年まで北海道開拓記

念館が行った雄武町雄武開成遺跡と、今回報告する浜佐呂間Ⅰ遺跡のみで、これまでの発掘調査においては殆どと言っていいほどこのような試みが行われていなかったのである。気候条件が良い道央・道南部とは規模や雑穀セットが異なっていたにしても、雑穀栽培が生業形態の中に取り入れられていたに違いない。クルミやドングリとは異なり、大きいものでも長径が数mmしかない雑穀類の種子を発掘時に発見するのは、大量にまとまって出土しない限り困難で、今後の発掘調査に際してはフローテーション等の手法を用いる必要があることをここで強調しておきたい。したがって、これまで同地域が雑穀栽培の空白地域であったのは、雑穀栽培が行われていなかったからではなく、擦文時代の生業は河川漁労が主体であるとの先入観をもとにした発掘調査を行っていたために、栽培種を発見しようとする努力に欠けていたことによるものと言っていいであろう。

さて、擦文時代における雑穀農耕の最も古い痕跡は道央部で発見されている。吉崎（1990a）により、8世紀代の恵庭市柏木11遺跡で出土の報告がされているアワ、キビ、アサがそれで、やはり吉崎（1990b）によって、8世紀代後半の同市中島松5遺跡でもアワ、キビの出土が確認されていることなどから、擦文時代前期から雑穀栽培が生業として行われていたことは確実である。それも、加藤（1980）によって指摘されていた、補助的な家庭菜園の規模をはるかに越えたもので、擦文時代の主生業とされている河川漁労と同程度の役割を担う規模で行なわれていた可能性が強くなってきている。

アワ、キビは両方もしくは片方が同時代中期、後期の遺跡から必ず出土しており、吉崎（1990b）が指摘しているように、雑穀セットの基本となっていたのがキビとアワで、これにオオムギ、コムギをはじめとした栽培種のいくつかが組合って、各遺跡で数種類の栽培種セットを構成していた様子が推定できる。このような複数の雑穀コンプレックスを保有していた状況は、佐々木（1988）によって提唱されている原初的農耕段階を越えた次の段階である初期的農耕段階に達していたことを示すものである。

オオムギは今のところ、9世紀以降の6遺跡から出土しているが、当遺跡で出土したのは吉崎・椿坂（1990）によって存在が指摘されていた「擦文オオムギ」のタイプに属するものである。後に述べるように、セットを構成する栽培種の組合せによってオオムギは二つのグループに区分することができそうである。

アサは擦文時代の遺跡ではサクシュコトニ川遺跡、柏木11遺跡について3例目の出土であるが、縄文時代後期の小樽市忍路土場遺跡、続縄文時代の江別市江別太遺跡から既に出土しており（矢野、1981・1989）、擦文以前から北海道で栽培されていた植物の一つである。シソ属についても同様に擦文時代の遺跡から出土しているが、やはり縄文時代後期の遺跡からの出土報告がある（矢野、1989）。

ところで、オホーツク海に面した地域では栽培種が出土した擦文時代の遺跡はなかったが、オホーツク文化の網走市二ツ岩遺跡2号住居址骨塚の土壤中から、マタビ属、ブドウ属などの種子とともにオオムギ、キビ、アワが出土していたことが明らかになっている

(山田・椿坂、

第6表 オオムギの計測値・計測平均値 (単位: mm)

1989 a)。表面に微細な付着物が観察されたことから、他の動植物と一緒に煮込まれたものがこぼれ落ちて炭化した状態を示すものと考えられている。また、オオムギの形態は当遺跡で発見されたものと同様な「捺文

遺 跡 名	粒 数	長さ	幅	厚さ
1 サクシュコトニ川遺跡 (吉野・椿坂、1990)	50	5.3	2.4	1.8
2 札前遺跡(山田・椿坂、1989b)	20	5.0	2.7	2.0
3 K441北34条地点(吉崎、1989)	2	4.2	2.9	2.3
4 香川三線遺跡(G. Crawford, 1987)	1	5.1	3.8	2.9
5 香川6遺跡(吉崎、1988a)	1	4.9	3.1	2.5
6 十勝太若月遺跡(後藤、1974)	50	4.8	3.0	2.4
7 江刺家遺跡(佐藤、1984)	100	5.53	2.83	2.23
8 五庵Ⅰ遺跡(松谷、1986)	10	4.39	2.85	2.44
9 五庵Ⅱ遺跡(佐藤、1986a)	12	6.43	3.39	2.84
10 古館Ⅱ遺跡(佐藤、1986b)	10	4.93	2.07	2.62
11 季平下安原遺跡(浪岡、1987)	50	5.3	2.6	2.2
12 川越市第一中学校敷地内遺跡 (直良、1956)	100	5.0	2.3	1.8
13 下北原遺跡(直良、1956)	1,000	5.0	2.7	2.2
14 ニツ岩遺跡(山田・椿坂、1989a)	15	4.29	2.93	2.38

オオムギ」タイプに属するものである。同住居址の骨塚からは9世紀末前後の捺文式土器が出土しており、捺文文化との接触によって土器とともに雑穀が持ち込まれた状況を示すものであった。しかし、オホーツク文化との接触が考えられる、周辺部およびオホーツク海に面した地域における捺文文化の遺跡から雑穀の出土例がなかったため、どの様にしてニツ岩遺跡に持ち込まれたのかが不明であった。場合によっては、大陸との関係が深いオホーツク文化の集団によって、大陸との交易によって食料源として持ち込まれていた可能性もあるし、また、山浦(1982)によって指摘されているように、大陸から持ち込まれた雑穀がオホーツク文化の集団によって栽培されていた可能性もあることから、ニツ岩遺跡での雑穀の取得方法を決めかねていた。

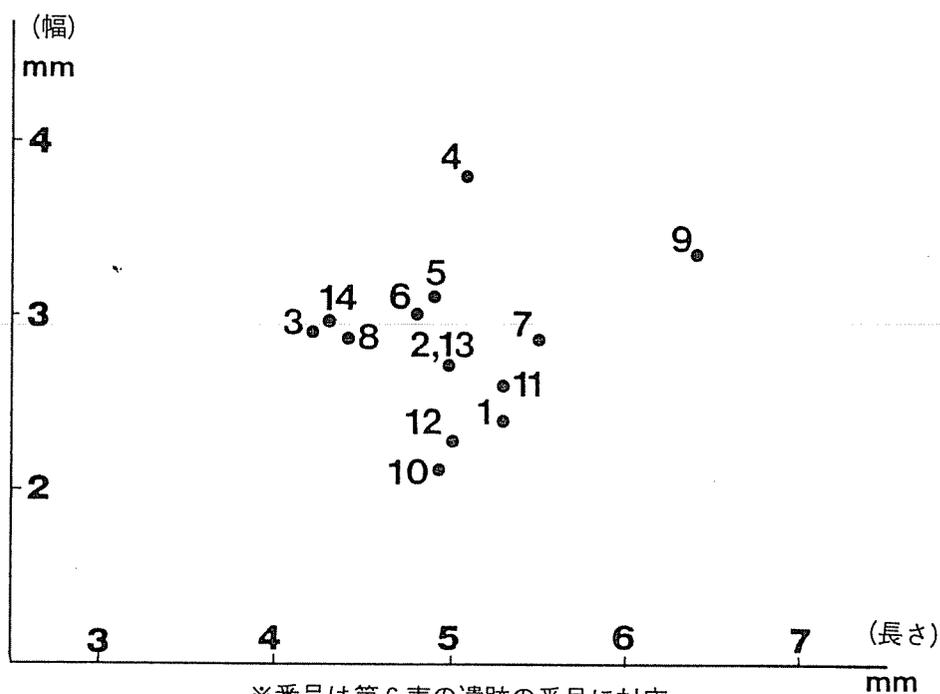
佐呂間町の捺文時代の遺跡から雑穀が出土したことにより、オホーツク海沿岸の捺文文化の集団によっても雑穀栽培が行われていたことが明らかになり、また、雑穀の組合せがオホーツク文化の遺跡から発見されたものの組合せと類似していることから、ニツ岩遺跡出土の雑穀については、周辺部の捺文文化との接触・交流によって持ち込まれた可能性がさらに強くなったと言えよう。

ただ、大陸沿海地方でも「捺文オオムギ」と類似した小粒で幅の広いオオムギが出土している状況が明らかになってきており、「捺文オオムギ」が大陸沿海地方から渡来してきた可能性も残されており、道北部のオホーツク文化圏内での状況の推移を待ちたい。

2) オオムギについて

2号、3号住居址から出土したオオムギ16粒の計測平均値は長さ4.36mm、幅2.81mm、厚

さ2.04mmと、
 オオムギが多く
 出土している
 札幌市サク
 シュコトニ川
 遺跡のもの
 (第6表No.1)
 と較べて長さ
 が短く、長さ
 の割に幅が広
 いことがわか
 る。同様の形
 態を持つもの
 としては網走
 市二ツ岩遺跡



(第6表No. 第2図 各遺跡から出土したオオムギの計測値・計測平均値プロット図
 14)、浦幌町十勝太若月遺跡(第6表No.6)のものと同程度の大きさである。

第6表には道内の擦文時代の遺跡と東北、関東地方の奈良から平安時代そして中世にかけた主な遺跡から出土したオオムギの計測平均値または計測値を一覧表にして示した。そのうちの長さ、幅を図上にプロットしたのが第2図である。

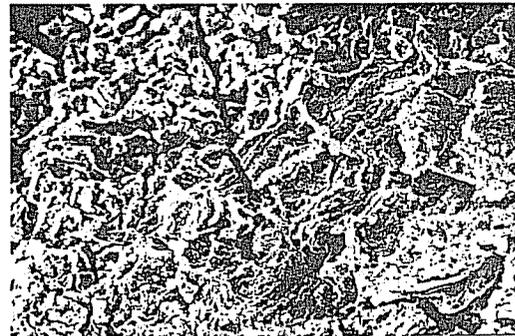
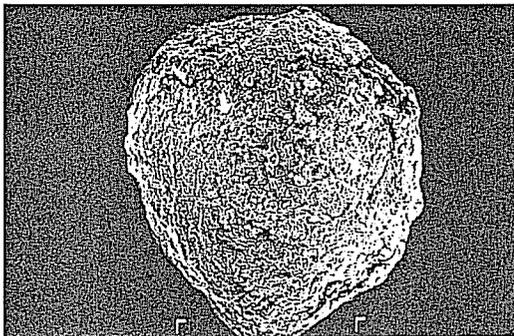
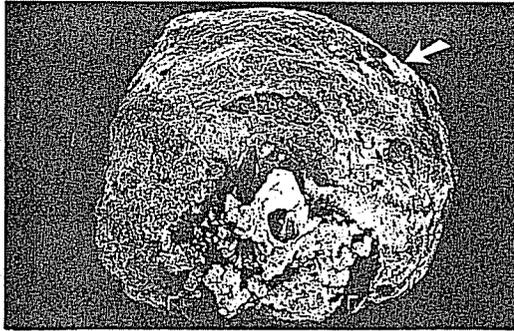
第2図で明らかなように、これらのオオムギを大きさの違いから2つのタイプに区分することが可能である。一つは、サクシュコトニ川遺跡、札前遺跡、江刺家遺跡、五庵Ⅱ遺跡などのような長粒で幅が狭いオオムギのグループ、他の一つは十勝太若月遺跡、二ツ岩遺跡、香川6遺跡、浜佐呂間Ⅰ遺跡、五庵Ⅰ遺跡のような、いわゆる「擦文オオムギ」のグループである。

ここで注目されるのが、「擦文オオムギ」が出土している遺跡は主に道北・道東地方に位置し、そこではコムギを伴わず、栽培種セットを構成する雑穀も数種類以内にとどまる点である。札前遺跡やサクシュコトニ川遺跡は道央・道南地方に位置し、そこでの栽培種セットは第5表のようにオオムギとともにコムギが出土し、さらには米を含む数種類以上の雑穀で構成されている。このような分布域の偏り、そして雑穀セットの組合せの違いが何によったものかはまだ不明である。要因としては、北海道への渡来時期、渡来時期が異なることによる栽培種セットの違い、そして渡来経路の違い、地域による気候風土の違いなどの幾つかの要因があげられるが、これらの要因とこれ以外の要因が複雑に錯綜していたものと推定される。この点に関しては、まだ出土例が少ないので出土数が増した時点で改めて検討を進めていかねばならないであろう。

引用・参考文献

- Gary W. Crawford (1986) 「Sakushukotoni-gawa Plant Remains」 『サクシュコトニ川遺跡(1)』 p. 1413-160、北海道大学
- Gary W. Crawford (1987) 「Kagawa 3-sen floatation sample analysis」 『香川三線遺跡』 p. 210-211、苫前町教育委員会
- 後藤 秀彦 (1974) 「住居址の発掘について」 『十勝太若月遺跡-第二次調査-』 p. 6-50、浦幌町教育委員会
- 石附喜三男 (1984) 「自然遺物」 『神恵内観音洞窟』 神恵内村教育委員会
- 岩崎 卓也 (1966) 「西月ヶ岡遺跡 第120住居址」 『北海道根室の先史遺跡』 p. 81-106、根室市教育委員会
- 加藤 晋平 (1980) 「擦文期の栽培植物について-とくにソバの問題-」 『北方科学調査報告』 1、p. 123-138、筑波大学
- 河野 広道 (1959) 「北海道出土の大型U字形鉄器について」 『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』 19号
- 近藤萬太郎 (1934) 『日本農林種子学』 p. 129-135
- 松谷 暁子 (1986) 「五庵 I・II 遺跡出土の炭化種子について」 『五庵 I 遺跡発掘調査報告書』 p. 436-437、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第97集
- 浪岡 実 (1987) 「李平下安原遺跡出土の炭化米及び炭化大麦について」 『李平下安原遺跡』 p. 481-492、青森県埋蔵文化財調査報告書 第111集
- 佐々木高明 (1988) 「日本における畑作農耕の成立をめぐって」 『畑作文化の誕生』 p. 1-22、日本放送出版協会
- 佐藤 敏也 (1984) 「鑑定および分析結果」 『江刺家遺跡発掘調査報告書』 p. 236-257、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第70集
- 佐藤 敏也 (1986 a) 「五庵 I・II 遺跡の穀類」 『五庵 I 遺跡発掘調査報告書』 p. 425-435、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第97集
- 佐藤 敏也 (1986 b) 「出土炭化穀類」 『古館 II 遺跡発掘調査報告書』 p. 301-336、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 第103集
- 山田 悟郎 (1983) 「花粉化石からみた古植生と栽培植物について」 『おびらたかさご』 小平町教育委員会
- 山田 五郎・椿坂恭代 (1989 a) 「オホーツク文化の遺跡にともなった雑穀」 『Project Seeds News』 No. 1、p. 3、Project Seeds
- 山田 悟郎・椿坂恭代 (1989 b) 「札前遺跡から産出した栽培植物について」 『札前 II』 p. 33-38、松前町教育委員会

- 山浦 清 (1982) 「オホーツク文化の終焉と擦文文化」 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』 第1号、p. 151-166
- 矢野 牧夫 (1981) 「石狩低地帯の先史遺跡から出土した植物遺体」 『北海道開拓記念館研究年報』 第9号
- 矢野 牧夫 (1989) 「忍路土場遺跡から出土した植物遺体」 『小樽市忍路土場遺跡・忍路5遺跡』 第4分冊、p. 193-212、北海道埋蔵文化財センター
- 吉崎 昌一 (1988 a) 「苫前町香川6遺跡出土の植物種子」 『苫前町香川6遺跡、香川三線遺跡』 p. 171-185、苫前町教育委員会
- 吉崎 昌一 (1988 b) 「縄文農耕から擦文農耕へ 北海道における原始農耕探査の現場から」 『鎌木義昌先生古稀記念論集 考古学と関連科学』 p. 105-122
- 吉崎 昌一 (1989) 「K441遺跡北34条地点出土の植物種子」 『K441遺跡北34条地点』 p. 70-80、札幌市文化財調査報告書 XXXVII、札幌市教育委員会
- 吉崎 昌一 (1990 a) 「北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体」 『柏木川11遺跡』 p. 104-113、北海道恵庭市発掘調査報告書
- 吉崎 昌一 (1990 b) 「中島松5遺跡B地点から出土した植物遺体」 『中島松5遺跡B地点・中島松7遺跡C地点』 p. 41-45、北海道恵庭市発掘調査報告書
- 吉崎昌一・椿坂恭代 (1990) 「サクシュコトニ川遺跡にみられる食料獲得戦略」 『北大構内の遺跡』 8、p. 23-35、北海道大学



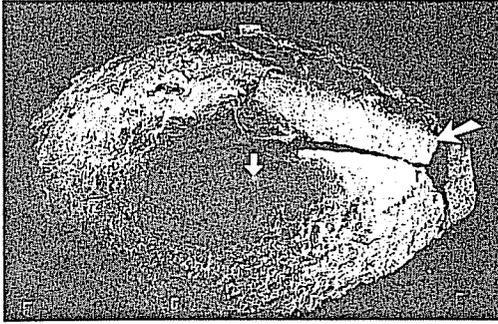
3a

3b

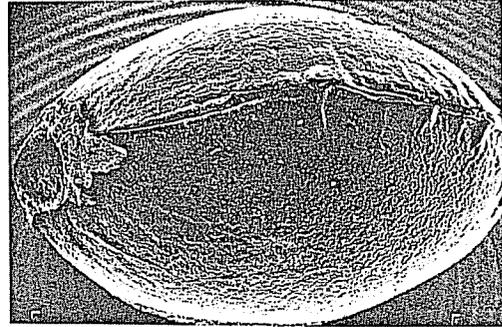
4

図版説明

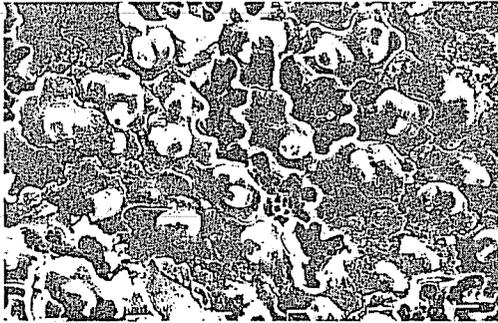
- | | | | |
|-----|--------------|-------|-----------------|
| 1a | キビ (背面) | ×35 | スケール「」の間隔 1.0mm |
| 1b. | 1aの拡大 (表面組織) | ×1000 | スケール「」の間隔 0.1mm |
| 2a | シソ属 | ×35 | スケール「」の間隔 1.0mm |
| 2b. | 2aの拡大 (表面組織) | ×750 | スケール「」の間隔 0.1mm |
| 3a | オオムギ (背面) | | |
| 3b | オオムギ (腹面) | | |
| 4 | ブドウ属 (腹面) | | |



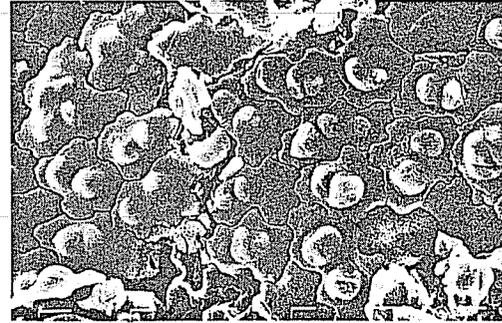
5a



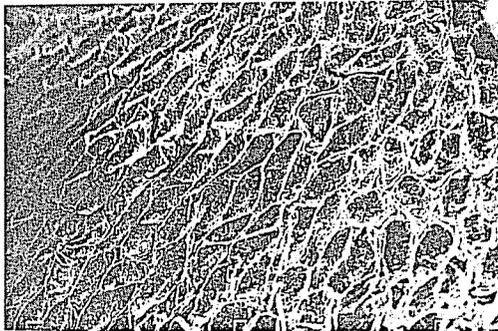
6a



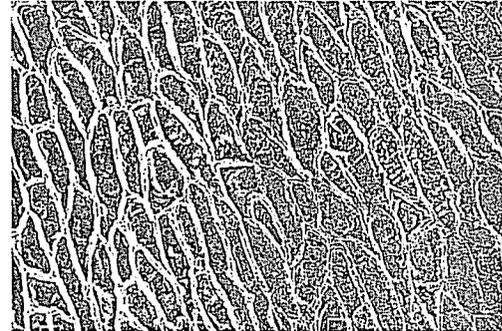
5b



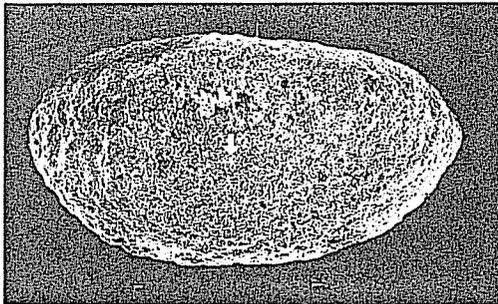
6b



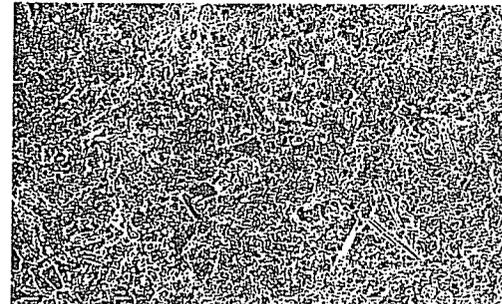
5c



6c



7a

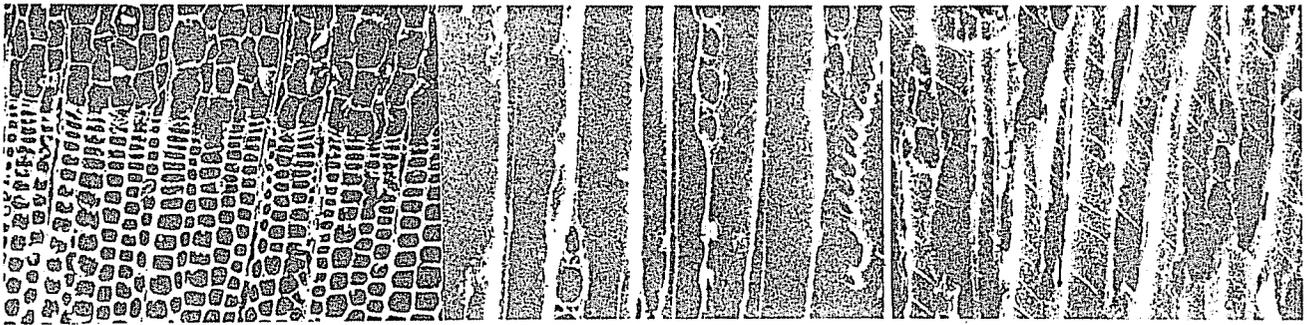


7b

図版 2 写真説明

- 5a アサ ×35
- 5b 5aの拡大 (表面組織) ×2000
- 5c 5aの拡大 (表面組織) ×500
- 6a 現生のアサ ×35
- 6b 6aの拡大 (表面組織) ×2000
- 6c 6aの拡大 (表面組織) ×350
- 7a エゾニワトコ ×35
- 7b 7aの拡大 (表面組織) ×200

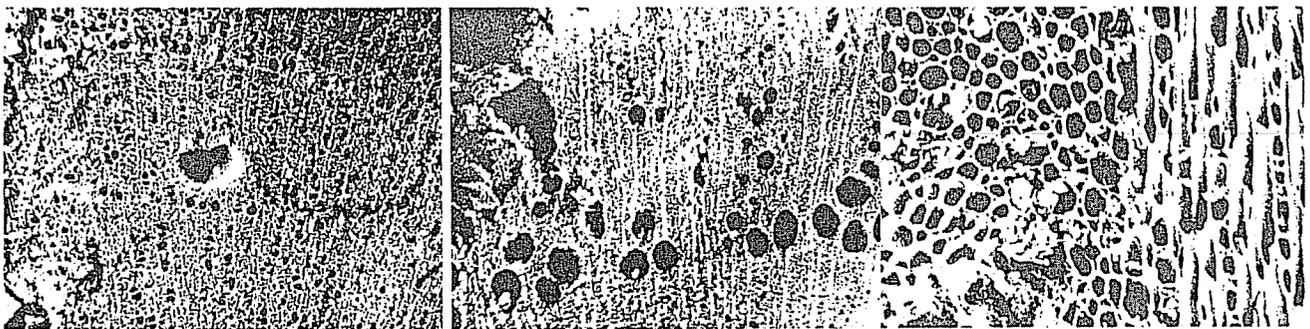
- スケール 「」の間隔 1.0mm
- スケール 「」の間隔 0.001mm
- スケール 「」の間隔 0.1mm
- スケール 「」の間隔 1.0mm
- スケール 「」の間隔 0.001mm
- スケール 「」の間隔 0.1mm
- スケール 「」の間隔 1.0mm
- スケール 「」の間隔 0.1mm



モミ属材 (Abies sp.) No10-5
木口×70

板目×200

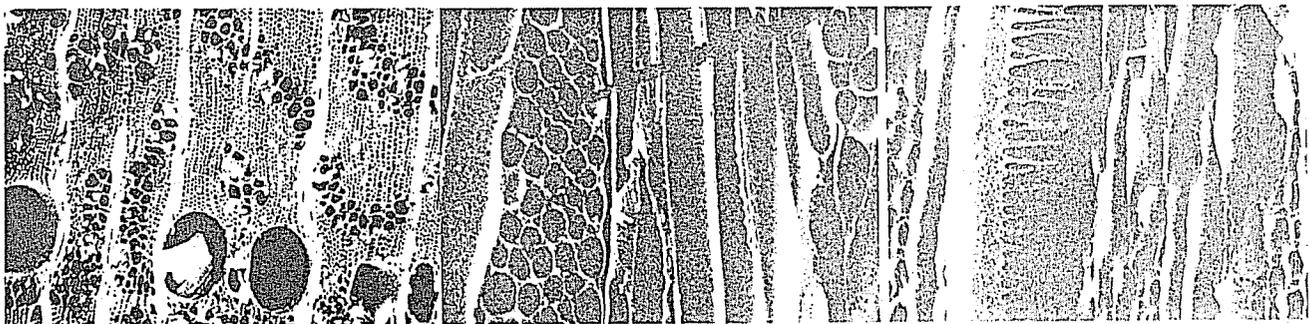
イチイ属材 (Taxus sp.) No1-2
板目×200



ハンノキ属材 (Alnus sp.) No14-3
木口×20

コナラ属材 (Quercus sp.) No7-6
木口×20

板目×200



ハリギリ属 (Kalopanax sp.) No11-1 木口×20

板目×200

広葉樹散孔材

板目×200



トネリコ属材 (Fraxinus sp.) No1-6
木口×20

板目×200

広葉樹材

木口×20

炭化材の電子顕微鏡写真